

新たに知られた小式部内侍本伊勢物語の断簡

田 中 登

一

現存本第六九段の狩の使の章段を冒頭に持つ小式部内侍本は、伊勢物語の伝本研究史上きわめて著名なものではあるが、その実、その内容を完全な形で伝えている伝本はひとつもなく、残念ながら我々は諸書に引用された逸文を通して、断片的にしか、その内容を知ることができないのが、実状である。

だが、近年になってその存在が知られるようになった、伝藤原為家筆六半切伊勢物語の二葉の断簡は、片桐洋一氏の報告によれば、第二四段の次に九九段が来、第六〇段の次に三七段が来るなど、現行の伊勢物語とは章段の配列が大きく異なり、また、同じ章段であっても、現行のそれとは本文上の異同がはなはだしいことが確認されている。

さらに、大島雅太郎旧蔵の伝二条為氏筆の歴博本の巻末には「或本云、これよりしもは、この本になきをえりいで、かきつらねたる也。小式部内侍が自筆の本にあるなり」として、都合二四章段を列挙しており、現行の伝本が持ち合わせていない章段を、小式部内侍本は少なからず持っていたことも、また知られるのである。

今回、取り上げるのは、伝称筆者こそ違え、既知の二葉とは、切の形態、一面の行詰、筆跡などから見て、まさしくツレと判断されるもので、その研究上の意義に鑑み、以下、簡単ながら、ここに紹介を試みるものである。

新出の断簡は、もと六半形の冊子本で、大きさは縦が一四・九センチの横が一三・六センチ。一面八行詰。料紙は鳥の子の素紙。伝称筆者は藤原家隆（三代古筆了仲の極め）となっているが、すでに述べたように、為家筆という既知の二葉とツレの関係にあたる。書写年代は、既知の二葉に見える、一首二行書きの和歌が左のように、句跨り（改行箇所を斜線で示す）になっているのが注意される。

あひをもはてかれぬるきもと、／めかね我身はいまそき
えはてぬめる

われならてしたひもとくなあさ／かほのゆふかけまたぬを

□はあれとも

これは古い書写形式であり、おそらく断簡は鎌倉初期から中期にかけての書写と推定される。

今、当該断簡の本行の全文を翻刻すれば、次のようになる。

1 にとしころありてといひければ

2 なに事もおもはずやありけん

3 むかしをとこ女におきふしものいひて

4 なをいか、思けんおとこのいひける

5 こゝろをそわりなきものとおもひける

6 みるものからやこひしかるへき

7 むかしをとこもたちの人をうし

8 なへるかもとにいひやりける

当該断簡には、行間に小字の書入れがある。今、これについて説明すると、まず一行目「いひければ」の「ひ」に見せ消ち符号を付し、右傍に「へり」と記す。また、五行目の歌頭に、まず「古今／集」と二行で記したのち、「十四恋四深養父題不知」と他出文献について注記する。

当該断簡と現行普通本との照応関係について説明すれば、全体は三章段からなり、まず一／二行目は、普通本の第三二段に当たるが、次の三／六行目は、普通本にはなく、歴博の伝為氏筆本などの巻末に付載された小式内侍本に見える章段の内、諸家いうところのC章段に該当する。既知の二葉は、章段の順序こそ違え、いずれも普通本に見られる章段であったが、ここに普通本にはなく、小式部内侍本に見られる章段が出現したこと

の意義は、けつして小さくはなからう。最後の七・八行目は現行普通本の第一〇九段に当たる。

すなわち、新出断簡は、普通本とは章段の順序が大きく異なるばかりではなく、その上普通本にない章段を持っていることが、ここに明らかとなったのである。

三

それでは、断簡の伝える本文が、既知の伝本のそれとどう違うのか、両者の比較を通して、検討してみよう。既知の伝本の本文は、加藤洋介氏の『伊勢物語校異集成』²⁾による。

まずは、三章段に及ぶ断簡の第一段目から。『校異集成』の底本は伝藤原定家筆本を使用。

【断簡】

【三二段】

むかし物いひける女に年ころ
ありて

いにしへのしつのをたまき
くりかえしむかしをいまに
なすよしも哉

にとしころありてといひけれ
はなに事ともおはすやあり
けん

といへりけれとなにともおも
はすやありけん

まず、目につくのは、普通本の歌の前の詞章「女」に年ころありて」という一文が、断簡では、歌を飛び越えて、「といひければ…」に接続してしまっていることである。目移りによって歌を書き落してしまったのであろうか、不審というよりほかない。

ただ、気になるのは、断簡冒頭の二行が、詞章は通常和歌より一・二字上げで記されるのだが、ここでは和歌より一字下げで記されていることである。この冒頭二行は、何か注記の本文でもあったのだろうか。

それはともかく、断簡「いひければ（いへりければ）」は、普通本の底本「いへりけれ」となっているが、断簡と同じく「いひければ」となっているのが、武田本系の明応三年奥書本。断簡の訂正本文「いへりければ」となっているのが、天福本系の雅親筆本と承久三年本に、古本系の伝慈鎮筆本、定家本系の伝為家筆本・藤房本など。断簡の独自異文というわけではけつしてない。

断簡「なに事も」は、諸本そろって「なにとも」で、これは断簡の独自異文となっている。

四

次は断簡の第二段目。普通本にはない章段で、伝為氏筆本などの巻末に付載された小式部内侍本に見える章段の内、いわゆるC章段に該当する。『校異集成』の底本は大島本系の阿波国文庫本。

【断簡】

むかしをとこ女おきふしもの
いひてなをいか、思けんおと
このいひける

こゝろをそわりなきものと
おもひぬるみるものからや
こひしかるへき

【C章段】

むかしをとこをんなをきふし
ものをいひていか、おほえ
けんおとこ

こゝろをそわりなきものと
おもひぬるかつみるひとや
こひしかるへき

断簡の詞章の部分「ものいひてなを」は、阿波国文庫本「もののをいひて」とあるが、阿波国文庫本のふたつの「の」の内、ひとつは衍字であろう。また、断簡の「なを」は阿波国文庫にはないが、同じ大島本系の泉州本にはあって、断簡の独自異文というわけではない。さらに断簡「思けん」が阿波国文庫本で

は「おほえけん」となっているが、泉州本に建仁二年本系の伝為相筆本が断簡と一致する。なお、断簡「をとこのいひける」の「のいひける」は、断簡の独自異文となっている。

ついで、断簡の和歌の部分「みるものからや」は、阿波国文庫本「かつみるひとや」で、伝為氏筆本が断簡に一致する。

ついでにいえば、この歌は古今集にあり、古今集では（伊達本で引く）

心をそわりなき物と思ひぬる見るものからやこひしかるへき

とあって、六条家本が「みるひとからや」とある以外、諸本そろって断簡と一致する。

五

最後に、断簡の第三段目について。

【断簡】

むかしをとこもたちの人を
うしなへるかもとにいひやりける

【一〇九段】

むかしおとこもたちの人を
うしなへるかもとにやりける

ここでは、異同はただ一箇所。断簡「いひやりける」が普通本「やりける」となっている。朱雀院塗籠本系の伝民部卿局本が断簡と一致する。

六

以上、既知の二葉に、新出の一葉をも併せ、伝家隆筆（為家筆とも）伊勢物語切の性格についてまとめてみると、次のようになる。

- 1 断簡は、普通本とは、章段の配列が著しく異なっている。
 - 2 断簡は、普通本にはない章段をもっている。
 - 3 断簡は、普通本に比べて、本文上の異同がはなはだしい。
- 2において、その章段が、小式部内侍本に見られるものであることは、新出断簡に関して、とりわけ注意されてよい点であろう。

〔注〕

（1） 片桐洋一『源氏物語以前』（笠間書院、平成十三年）

（2） 加藤洋介『伊勢物語校異集成』（和泉書院、平成二十八年）

（たなか のぼる／本学教授）

